

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和 8 年度病虫害発生予報第 4 号 (7 月) について

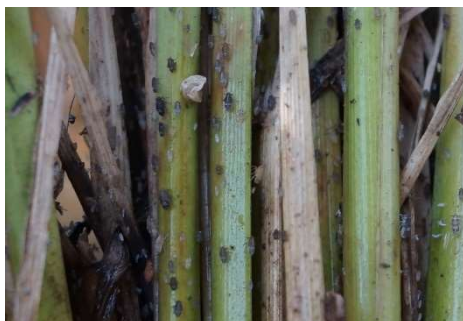
このことについて、病虫害発生予報第 4 号を発表したので送付します。

予報第 4 号

海外飛来性害虫と斑点米カメムシの発生に注意しましょう

梅雨前線が活発化し、海外飛来性害虫であるウンカ類やコブノメイガが飛来して来ています。ウンカ類の中でも特にトビイロウンカは収穫間際に多発生すると坪枯れが発生し、収量に大きく影響します。コブノメイガについては、ジアミド系農薬の薬剤抵抗性が問題となっているため、薬剤選定に注意が必要です。

また、品質低下を招く斑点米カメムシの中でも、イネカメムシについては、これまで県北を中心に確認されていますが、昨年は県南の早植えほ場でも発生が確認されています。早期～もち米等、幅広い作型を有する地域では、今後、生息場所の拡大に注意が必要です。



茎を吸汁するトビイロウンカ



穂を吸汁するイネカメムシ



斑点米の被害

< 予想される向こう 1 か月の天候 (令和 8 年 6 月 26 日～7 月 26 日) >

向こう 1 か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため、高いでしょう。

梅雨前線や湿った空気の影響を受けにくい時期があるため、向こう 1 か月の降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いでしょう。

向こう 1 か月の気温・降水量・日照時間 (数値は予想される出現確率)

九州北部地方	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低10 並40 高50% 平年より高い見込み	少40 並40 多20% 平年並か少ない見込み	少20 並40 多40% 平年並か多い見込み

(福岡管区気象台 令和 8 年 6 月 25 日発表 1 か月予報より抜粋)

7月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現況 (発生量)	7月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
水稲 (普通期)	セジロウンカ トビイロウンカ	並 並	やや少 並	並 並
かんきつ	黒点病 かいよう病 ミカンハダニ	並 やや少 やや多	並 少 やや多	並 並 多
なし	黒星病 ナシヒメシンクイ ハダニ類	やや少 やや多 やや少	やや少 並 並	並 並 やや多
かき	炭疽病 フジコナカイガラムシ ハマキムシ類	並 少 多	やや少 やや少 やや多	少 並 並
ぶどう	べと病	並 ³⁾	— ³⁾	並
果樹共通	果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ)	— ⁴⁾	— ⁴⁾	多 ⁴⁾ 多発生した一昨年並
イチゴ	うどんこ病 炭疽病 ハダニ類	やや少 並 並	並 並 やや多	並 並 やや多
アスパラガス	斑点性病害 (斑点病・褐斑病) アザミウマ類	並 ⁵⁾ やや多 ⁵⁾	— ⁵⁾ — ⁵⁾	並 やや多
茶	炭疽病 カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャノホソガ チャノキイロアザミウマ チャノミドリヒメヨコバイ チャトゲコナジラミ	やや少 やや少 やや多 やや少 多 多 やや少	やや少 やや少 やや多 やや少 多 多 やや少	並 並 やや多 少 多 多 並

注1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、

「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋を総合的に判断して発生量を予想しています。

注3) ぶどうについては、2023年からの調査で平年値がないため、前年比を記載しています。

注4) 果樹共通・果樹カメムシ類の発生量は年次間変動が大きいため、前年比としています。

注5) アスパラガスについては、2024年からの調査で平年値がないため、前年比を記載しています。

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新しています。

発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病害虫防除所のホームページへのアクセス

URL: <https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo.html>

または右QRコード①

○X（旧Twitter）で定期情報や警報等発出のお知らせを始めました。

Xの本アカウント（福岡県農作物病害虫情報）へのアクセス

URL: https://x.com/PPDPO_Fukuoka または右QRコード②

①⇒



②⇒



【普通作物：水稻】

1 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少なく、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月1～18日の県内5か所の予察灯※における誘殺数は2頭（平年 32.0 頭、前年 35 頭で、平年並であった（±））。

誘殺数 < 筑紫野市 > 0 頭（平年 0.1 頭、前年 1 頭）

< 糸島市 > 2 頭（平年 10.1 頭、前年 2 頭）

< みやま市※ > 0 頭（平年 1.8 頭、前年 7 頭）

< 遠賀町 > 0 頭（平年 20.1 頭、前年 25 頭）

< 荏田町※ > 0 頭（平年 0.6 頭、前年 0 頭）

※2025年度にみやま市（旧・大木町）、荏田町（旧・行橋市）予察灯を移転したため、旧設置場所の平年値・前年値を使用（トビイロウンカについても同様）。

イ 6月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

10株当たり払い落とし成幼虫数0頭（平年 0.9 頭、前年 0 頭）

発生ほ場率 0%（平年 13.5%、前年 0%）

ウ 早期水稻調査地点では、既にセジロウンカの定着が確認されている（データ略）。

エ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 飛来成虫が多い場合、産卵部位の褐変や次世代幼虫の吸汁害により、イネの初期生育が抑制されるため、箱施薬剤を施用していないほ場では、今後の飛来状況に十分注意する。

イ 新規需要米（飼料用米等）の中にはセジロウンカに弱く、多発生するリスクの高い品種があるため、今後のほ場での発生状況に注意する。

ウ **農薬の使用及び散布等にあたっては、最終頁の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。**

2 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月1～18日の県内5か所の予察灯※における誘殺数は、0頭（平年 0.5 頭、前年 0 頭）と平年並であった（±）。

誘殺数 < 筑紫野市 > 0 頭（平年 0 頭、前年 0 頭）

< 糸島市 > 0 頭（平年 0.2 頭、前年 0 頭）

< みやま市※ > 0 頭（平年 0 頭、前年 0 頭）

< 遠賀町 > 0 頭（平年 0.2 頭、前年 0 頭）

< 荏田町※ > 0 頭（平年 0.1 頭、前年 0 頭）

イ 6月5半月調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

10株当たり払い落とし成幼虫数0頭（平年 0 頭、前年 0 頭）

発生ほ場率 0%（平年 0%、前年 0%）

ウ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 今後の飛来状況や7月中旬以降の飛来後第1世代幼虫の発生状況に注意する。

イ 箱施薬剤が施用されていないほ場や、箱施薬剤の効果低下が懸念される早植えほ場では、発生状況に注意する。

ウ ほ場内では集中的に生息するので、ほ場全体での発生状況を確認する。

【果樹：かんきつ】

1 黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病果率 0.1% (平年 0.4%、前年 0%)

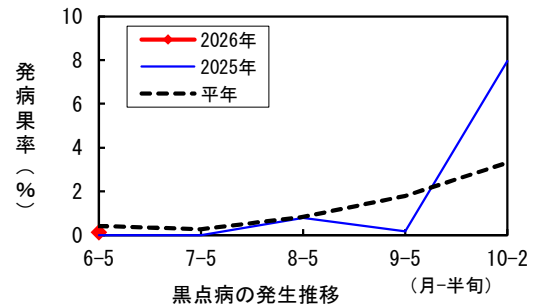
発病ほ場率 18.2% (平年 14.5%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている(－～±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出し処分する。

イ 雨媒伝染するため、梅雨時期は、前回防除後の積算降水量や散布間隔に応じた適期防除を行う。



2 かいよう病

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(－～±)。

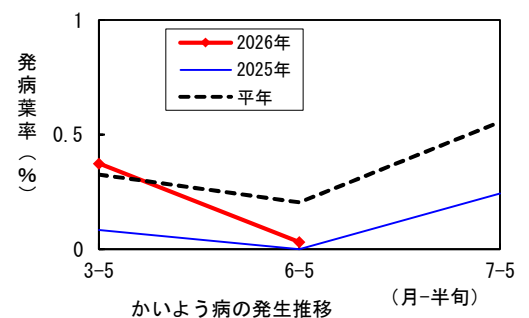
発病葉率 0.03% (平年 0.2%、前年 0%)

発病ほ場率 9.1% (平年 18.2%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生条件となっている(－～±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 雨媒伝染をするため、発生が多い園では、風雨前の防除を徹底する。



3 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±～+)。

寄生葉率 16.4% (平年 8.6%、前年 0.7%)

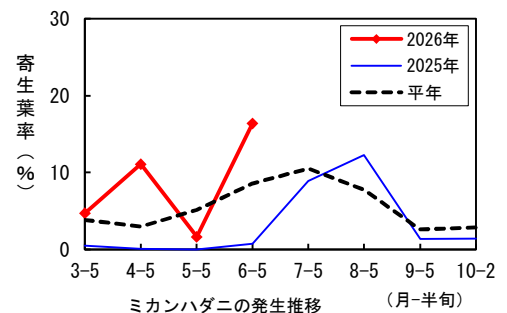
発生ほ場率 72.7% (平年 50.0%、前年 18.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生条件となっている(±～+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除に努める。

イ 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。また、薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：なし】

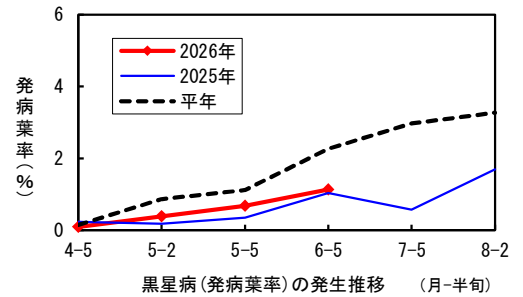
1 黒星病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

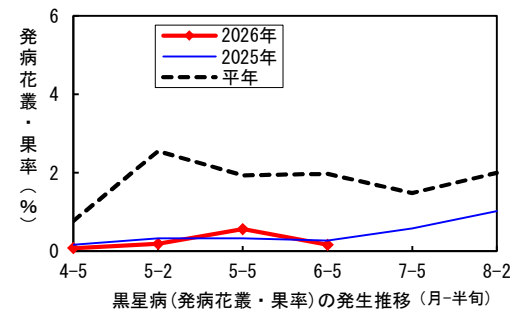
(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。
- 発病葉率 1.1%（平年 2.3%、前年 1.0%）
- 発病ほ場率 66.7%（平年 74.1%、前年 91.7%）
- 発病果率 0.2%（平年 2.0%、前年 0.3%）
- 発病ほ場率 33.3%（平年 53.6%、前年 50.0%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生条件となっている（－～±）。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 伝染源となる罹病葉や罹病果は、見つけ次第、園外に持ち出し処分する。
- イ 薬剤感受性の低下を避けるため、異なる系統の薬剤ローテーション散布し、DMI剤、QoI剤、SDHI剤、AP（アピバリジン）剤、DHODH剤については、同一系統剤の使用回数を年間で2回以内にとどめる。
- これらの薬剤を用いる場合は、保護殺菌剤と混用することにより防除効果の維持が期待できる。



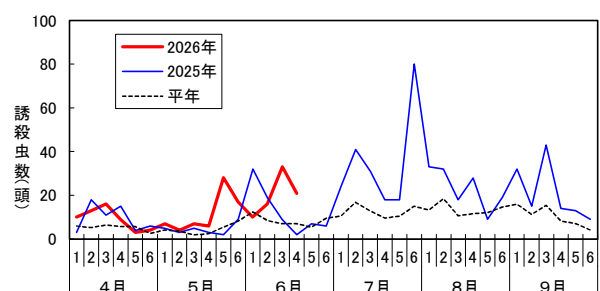
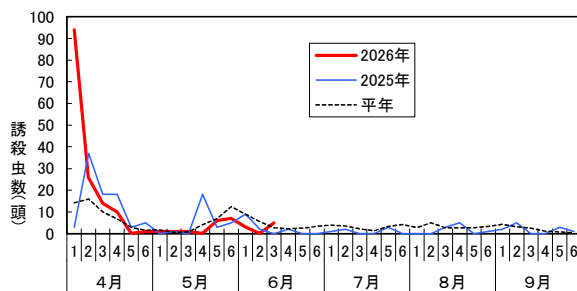
2 ナシヒメシンクイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 第1～第2世代と考えられる5月1半旬～6月4半旬のフェロモントラップにおける雄成虫誘殺数は地域差があり、朝倉市杷木大山で平年よりやや少なく（－～±）、八女市黒木町で平年よりやや多かった（±～＋）。
- 誘殺数 朝倉市杷木大山：26頭（平年 46頭、前年 40頭）
- 八女市黒木町木屋：149頭（平年 62頭、前年 89頭）
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生条件となっている（±～＋）。



朝倉市杷木大山

八女市黒木町木屋

フェロモントラップによるナシヒメシンクイの誘殺数

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 7月以降の第3～4世代の発蛾最盛期直後（若齢幼虫期）を目安に防除を行う。
- また、発蛾最盛期を過ぎても成虫が多く見られる場合は、1回目の防除の7～10日後に追加防除を行う。
- イ 幼虫は主に果頂部から食害侵入するので、防除に当っては果実に薬液が十分かかるように散布する。
- ウ 被害果は埋没処分し、発生源を除去する。
- エ 交信攪乱剤等を利用した総合防除を積極的に実施する。

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

寄生葉率 2.8%（平年 4.1%、前年 0.9%）

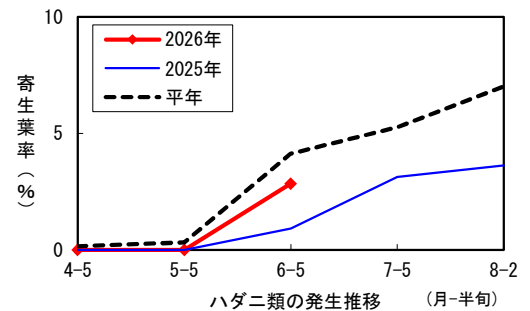
発生ほ場率 33.3%（平年 40.1%、前年 16.7%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除に努める。

イ 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。また、薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年より少

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

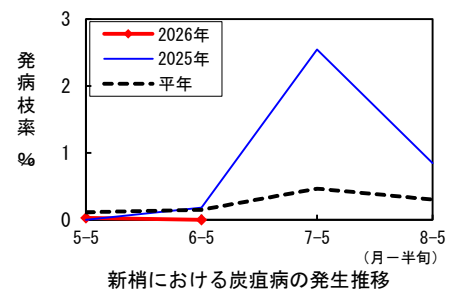
発病枝率 0%（平年 0.15%、前年 0.18%）

発病ほ場率 0%（平年 19.3%、前年 27.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（－～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。



2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

寄生果率 0.03%（平年 1.61%、前年 0.03%）

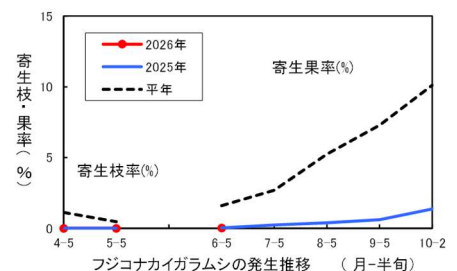
発生ほ場率 9.1%（平年 52.2%、前年 9.1%）

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除に当たっては、天敵への影響が比較的小さい薬剤を選択する。なお、果樹カメムシ類の防除等でやむを得ずフジコナカイガラムシの天敵に影響のある薬剤を使用する際は、リサージェンスが起こる可能性があるのでフジコナカイガラムシにも効果のある薬剤を選択する。

イ 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、散布むらがないよう十分な薬量を丁寧に散布する。

ウ 化学薬剤だけでは防除が困難であるため、天敵や交信攪乱剤等を利用した総合防除を積極的に実施する。



3 ハマキムシ類 (チャノコカクモンハマキ、チャハマキ)

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5日半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

被害果率 1.17% (平年 0.20%、前年 0.36%)

発生ほ場率 72.7% (平年 31.3%、前年 72.7%)

イ 越冬～第1世代と考えられる4月1日半旬～6月4日半旬までのフェロモントラップにおける雄成虫誘殺数は、うきは市では平年並～やや多く(±～+)、八女市では平年よりやや少なかった(－～±)。

誘殺数 チャノコカクモンハマキ <うきは市> 408頭 (平年 440頭、前年 764頭)

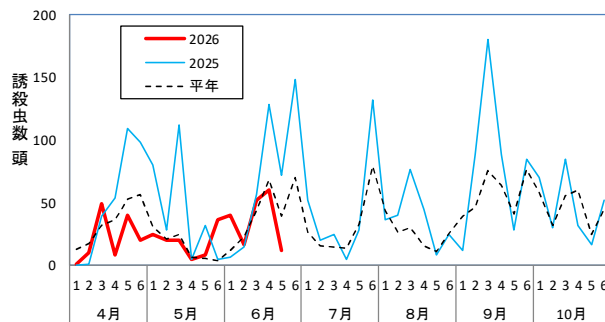
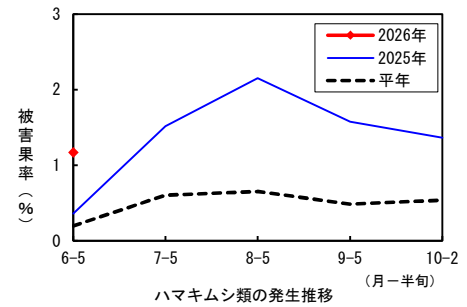
<八女市> 528頭 (平年 909頭、前年 381頭)

チャハマキ

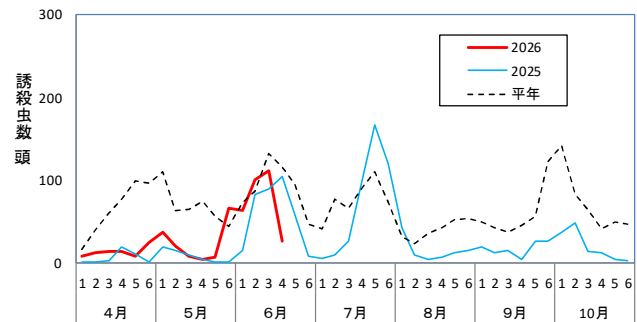
<うきは市> 198頭 (平年 45頭、前年 65頭)

<八女市> 89頭 (平年 141頭、前年 1頭)

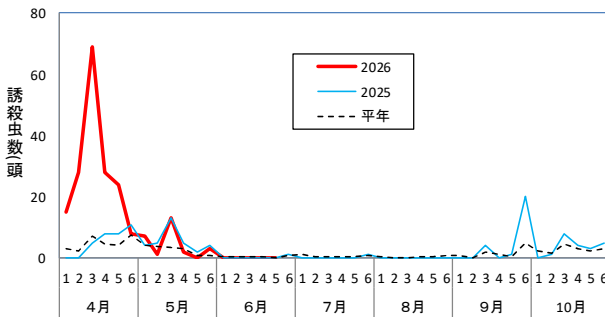
※チャノコカクモンハマキ・チャハマキともに、2024年度以降、八女市のフェロモントラップを移転したため、過去データとの比較は参考値となる。



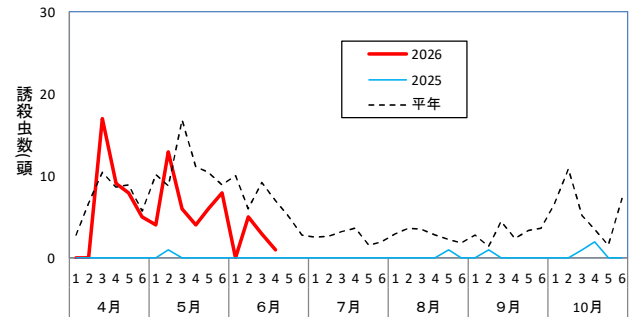
チャノコカクモンハマキ(うきは市)



チャノコカクモンハマキ (八女市)



チャハマキ (うきは市)



チャハマキ (八女市)

ハマキムシ類のフェロモントラップによる誘殺数

ウ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±～+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 成虫の発生に注意し、発生が多い園では発蛾最盛期の7～10日後の防除を徹底する。

イ 幼虫は葉と葉が重なった部分や、ヘタと果実の間に多く潜んでいるため、散布むらがないよう十分な薬量を丁寧に散布する。

【果樹：ぶどう】

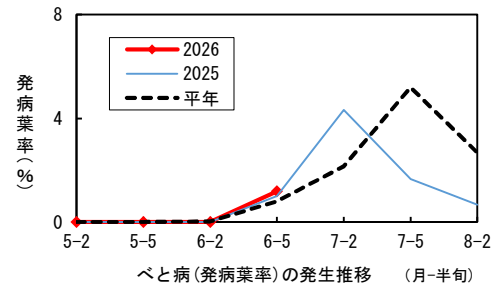
1 ベと病

(1) 予報の内容

発生量：前年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は前年並であった(±)。
発病葉率 1.2%(前年1.0%、前々年 0.1%)
発病ほ場率 40.0%(前年 60.0%、前々年 20.0%)
※ぶどうの調査は2023年度から開始のため平年値なし。グラフの平年値は2023～2025年の3か年平均値を示す。



- イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている(±〜)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 伝染源となる罹病葉や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。
イ 雨媒伝染をするため、発生が多い園では、風雨前の防除を徹底する。

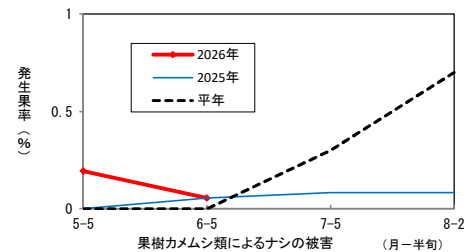
【果樹共通：果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ他）】

(1) 予報の内容

発生量：前年より多、多発した一昨年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、ナシでの被害果は平年よりやや多かった(±〜+)。
被害果率 0.06%(平年 0.03%、前年 0.06%)
発生ほ場率 16.7%(平年 8.2%、前年 8.3%)



- イ 4月1半旬～6月4半旬までのフェロモントラップにおけるチャバネアオカメムシの雄成虫誘殺数は地域差があるものの前年より多く、前々年並～多かった(+).

誘殺数 <宗像市> 377頭(前年 1頭、前々年 400頭)
<筑紫野市> 11,224頭(前年 271頭、前々年 2,809頭)
<うきは市> 2,360頭(前年 5頭、前々年 1,060頭)

- ウ 4月1半旬～6月4半旬までの予察灯におけるチャバネアオカメムシの誘殺数は、前年より多く、筑紫野市以外では前々年より多かった(+).

誘殺数 <筑紫野市> 907頭(前年 24頭、前々年 2,492頭)
<朝倉市> 1,067頭(前年 12頭、前々年 377頭)
<うきは市> 169頭(前年 19頭、前々年 23頭)
<飯塚市> 377頭(前年 22頭、前々年 349頭)

- エ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±〜+)。

- オ 越冬量は多く、6月上旬のヒノキ球果結実量達観調査では、着果量はやや少なかった(7月の飛来量+)。

※詳細については、病虫害防除所ホームページ(果樹カメムシ類、ヒノキ球果結実量)

(<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/attachment/258402.pdf>)を参照する。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 飛来や被害発生状況は地域や園により異なるので、園内全体を注意して見回り、飛来を認めたら直ちに防除する。
イ カメムシ類は広範囲に移動するため、薬剤散布は広域一斉防除に心掛けるとともに、収穫前日数等農薬使用基準を遵守する。また、降雨があると薬剤の残効が短くなるので、散布間隔に注意する。
ウ 今後の発生状況については病虫害防除所ホームページ(<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo-doukou.html#kazyu>)を参照する。

【野菜：イチゴ（育苗期）】

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）が、一部ほ場で多発生した。

発病株率 3.4%（平年 12.9%、前年 8.9%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

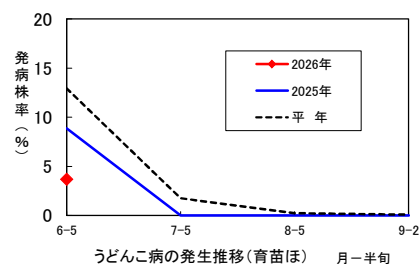
(3) 防除上注意すべき事項

ア 採苗が終わった親株は、育苗ほから速やかに撤去する。

イ 苗の間隔を空け通風を図る。

ウ 不要な下葉は早めに除去する。下葉かぎ後に防除を行うと効果的で、薬液が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。

エ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病株率 0.01%（平年 0.04% 前年 0.1%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 昨年多発生したほ場では、特に下記の項目を遵守し、防除を徹底する。

イ 採苗が終わった親株は、育苗ほから速やかに撤去する。

ウ 雨よけ育苗等でも風通しが悪いと拡大しやすいので、苗の間隔を空け通風を図る。

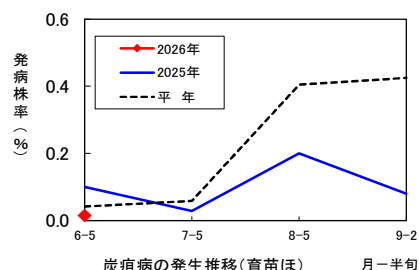
エ 高温期の激しい降雨や過剰なかん水により、急速に蔓延することがある。ほ場内での発生状況に注意し、発病苗及び周辺の苗は速やかに持ち出し処分する。

オ 窒素肥料を多用すると発病しやすいので、適正な肥培管理に努める。

カ 葉かき作業直後や降雨前後を含めて定期的な予防散布を行う。

キ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。令和7年度病害虫発生予察技術情報第13号（イチゴ炭疽病菌薬剤感受性検定結果）を参照。

<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/attachment/277102.pdf>



3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）が、一部ほ場で多発生した。

寄生株率 3.7%（平年 4.7% 前年 4.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

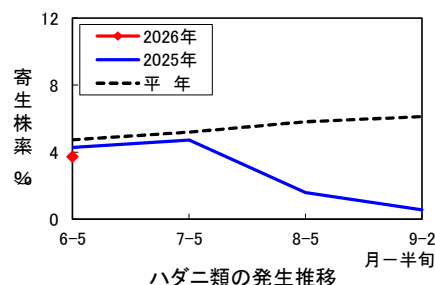
(3) 防除上注意すべき事項

ア 採苗が終わった親株は、育苗ほから速やかに撤去する。

イ 寄生株は葉かきを強めに行い、寄生葉を取り除くよう努める。なお、摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れて密封し処分する。

ウ ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

エ 多発生すると防除は困難になるので初発段階での防除に努める。



- オ 薬剤感受性が低下しやすいため、気門封鎖剤も利用し、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- カ ハダニ類に登録のある薬剤の多くは浸透移行性に乏しいため、葉裏に薬液が十分付着するように丁寧な散布を心掛ける。防除は摘葉後に行うと効果的である。
- キ 化学薬剤だけでは防除が困難であるため、天敵を利用した総合防除を積極的に実施する。
 <県ホームページ掲載の「病害虫・雑草防除の手引き」-「IPMの推進」-「イチゴのIPMマニュアル」参照>
https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/805964_62798273_misc.pdf

【野菜：アスパラガス】※2024年度からの調査のため、平年値はない。

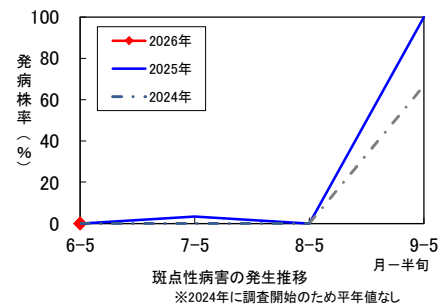
1 斑点性病害（斑点病・褐斑病）

（1）予報の内容

発生量：前年並

（2）予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は前年、前々年並であった（±）。
 発病株率 0%（前年 0% 前々年 0%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、並発生条件となっている（±）。



（3）防除上注意すべき事項

- ア 発病茎葉は見つけ次第速やかに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- イ 不要な茎葉は除去、処分し、通風、採光をよくする。
- ウ 多湿にならないように換気に注意するとともに、ほ場の排水対策も心掛ける。
- エ 病勢が進展すると防除が困難になるので、初期防除を徹底する。
- オ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

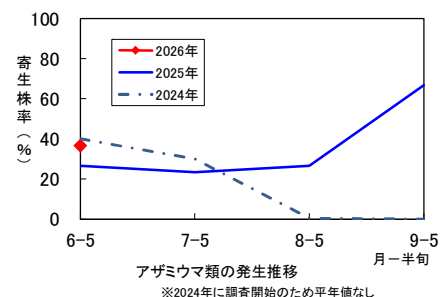
2 アザミウマ類

（1）予報の内容

発生量：前年よりやや多

（2）予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は前年よりやや多く（±～+）、前々年並であった。
 寄生株率 36.7%（前年 26.7% 前々年 40.0%）
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生条件となっている（±～+）。



（3）防除上注意すべき事項

- ア 多発生すると防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。また、定期的な薬剤散布を実施する。
- イ 過繁茂は散布むらの要因となるため、不要な茎葉を除去し、処分する。
- ウ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- エ 化学薬剤だけでは防除が困難であるため、除草の徹底や防虫ネットの利用といった総合防除を積極的に実施する。

【茶】

1 炭疽病

（1）予報の内容

発生量：平年よりやや少・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

発病葉数 0.1 葉（平年 3.5 葉、前年 0.8 葉）

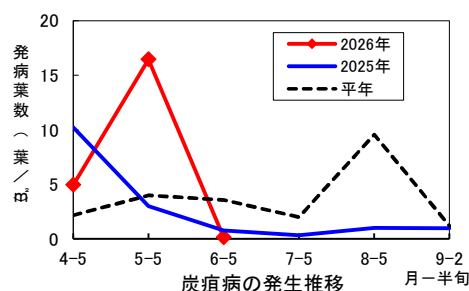
発病ほ場率 20.0%（平年 45.7%、前年 71.4%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（－～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 雨滴により孢子が飛散伝搬するため、防除は降雨前日までに実施すると効果的である。

イ 3番茶摘採日又は刈落日の防除は欠かさず行う。薬剤感受性の低下を防ぐため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

50 葉当たり虫数 0.8 頭（平年 39.8 頭、前年 0.2 頭）

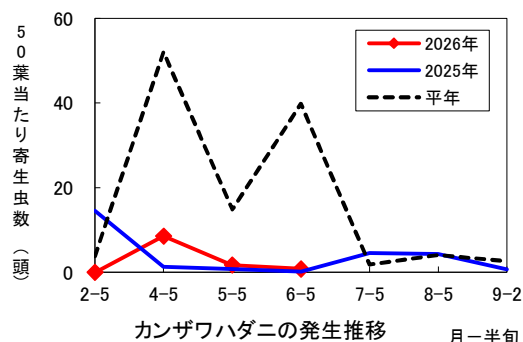
寄生葉率 1.6%（平年 9.0%、前年 0.4%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発している園では、効果の高い薬剤を裾葉や葉裏に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 同一系統薬剤の連続散布を防ぐため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



3 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～＋）。

1 ㎡当たり葉巻数 0.20 葉（平年 0.09 葉、前年 0.08 葉）

発生ほ場率 20.0%（平年 14.5%、前年 25.0%）

イ 越冬～第1世代と考えられる4月1半旬～6

月4半旬までのフェロモントラップにおける雄成虫誘殺数は、うきは市では平年並み、八女市では平年よりやや少なかった（－～±）。

誘殺数 <うきは市> 408頭（平年 440頭、前年 764頭）

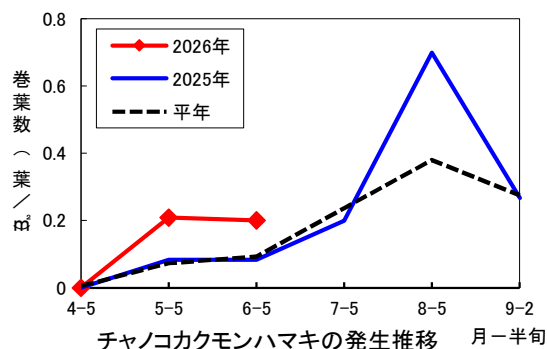
<八女市> 528頭（平年 909頭、前年 381頭）

ウ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は例年7月下旬頃であるため、ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多い時から7～10日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が確認されたら直ちに防除を行うとともに、散布むらがないよう十分な薬量を丁寧に散布する。



4 チャノホソガ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年より少

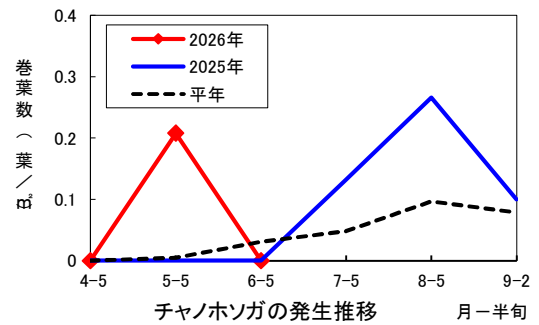
(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。
1㎡当たり葉巻数 0.00 葉（平年 0.03 葉、前年 0.00 葉）
発生ほ場率 0%（平年 5.1%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は例年7月上～中旬頃であため、ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多い時から7～10日後を目安に防除を行う。
- イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が確認されたら直ちに防除を行うとともに、散布むらがないよう十分な薬量を丁寧に散布する。



5 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

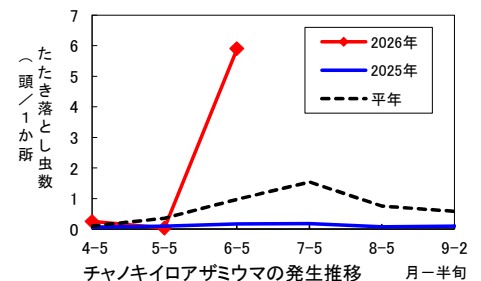
(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった（＋）。
たたき落とし虫数頭 5.9 頭（平年 1.0 頭、前年 0.2 頭）
発生ほ場率 80.0%（平年 53.5%、前年 33.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発生量は例年6～7月に最も多くなるので、B5判板上の10回たたき落とし法で、10頭以上見られる場合は防除を行う。
- イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



6 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

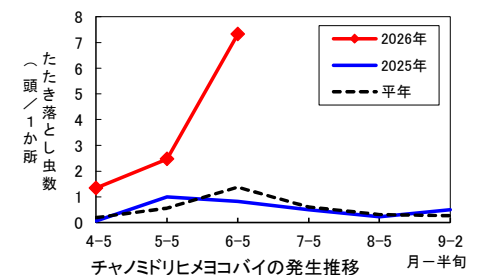
(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった（＋）。
たたき落とし虫数頭 7.3 頭（平年 1.4 頭、前年 0.8 頭）
発生ほ場率 100%（平年 73.0%、前年 100%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 二番茶期から秋にかけて発生が多くなるため、成幼虫の発生状況に注意し、B5判板上の10回たたき落とし法で、4頭以上見られる場合は防除を行う。
- イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



7 チャトゲコナジラミ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

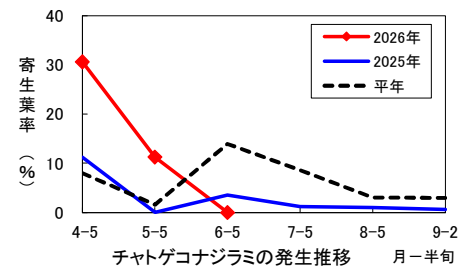
- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（±～－）。
寄生葉率 0%（平年 13.9%、前年 3.6%）
発生ほ場率 0%（平年 76.6%、前年 55.6%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア チャトゲコナジラミは年3～4回発生し、防除適期は成虫発生後の若齢幼虫発生期である。防除適期は例年7月中～下旬頃であるが、成虫が最も多い時期から14日後を目安に防除を行う。

イ 幼虫は葉裏に発生しているので、農薬の散布にあたっては、葉裏に十分にかかるように丁寧に散布する。



農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、農薬適正使用の指導を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。農薬を使用する際は、使用者自身の安全確保はもちろん、周囲の人や家畜、隣接する作物、河川等の環境への影響にも十分配慮してください。

1 農薬適正使用の徹底

- 適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。※同一農薬であっても、メーカーによって登録内容が異なる場合があるので、しっかり確認する。
- 有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として適正に処分する。

2 飛散防止対策の徹底

- 風の弱い時に散布する。
- 風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。
- 飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。
- 散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。
- 農薬散布の実施において、周囲の生産者、住民に周知を図る。

3 保護具の着用

- 農薬の散布前に、ラベルの注意・警告マークをよく確認する。マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用し、薬液を作成する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

- 噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。残液は、ほ場外への流出や環境、後作へ影響が生じないよう十分配慮し、ほ場内の農作物が植え付けされていない土壌に散布する。※農薬散布に際しては、残液が出ないように必要な量の散布薬液を準備する。

5 防除履歴の記帳

- 農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

- 空容器は、地域の農業用廃プラスチック適正処理推進協議会が実施する回収や、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは『廃棄物の処理及び清掃に関する法律（廃掃法）』で禁止されているので、絶対に行わない。